

登別市史編さんだより

ご協力ありがとうございました－市民による地域の昔を語る座談会

今年1月から各地区で開催してきた市民による地域の昔を語る座談会、全地区を終了することができました。ご参加いただいた皆さん、貴重なお話をありがとうございます。また、参加の声掛けをしていただいた町内会長をはじめとする町内会役員の皆さんにも重ねてお礼申し上げます。

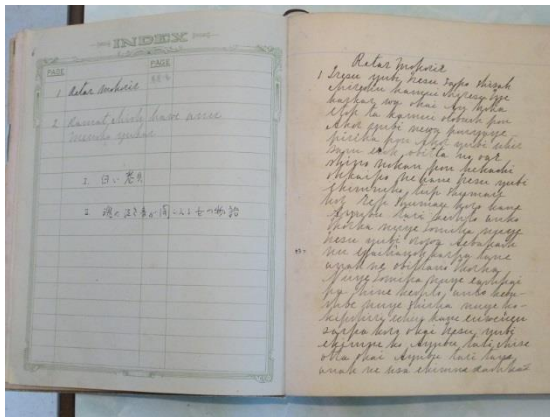
さて、今回は鷺別地区で出たお話を紹介しました。すると早速市内の方からご連絡があり、鷺別地区の昔のお話を別の角度から聴くことができました。

市史編さんグループでは、話題や資料の提供など皆さんの市史編さんへのご参加をお待ちしています。お気軽に市役所3階の市史編さんグループに足をお運びください。



新生地区での様子（平成29年4月28日）

資料拝見～金成マツノート～



金成マツノート（萱野茂二風谷アイヌ資料館 所蔵）

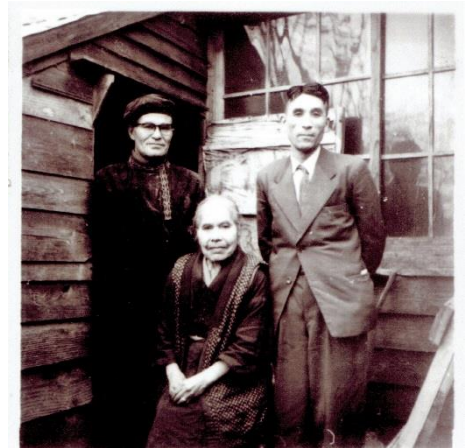
登別市の功労者第1号である金成マツが、アイヌに伝わる叙事詩・ユカラを言語学者・金田一京助のためにローマ字で記録したのが、写真の金成マツノート（通称）です。

ノートはていねいな筆記体で記録されていますが、翻訳者によると「読み進めると字体に若干の乱れが見え、その後綺麗な字体に戻っていることから、疲れが出て一休みしたであろう部分が推測できる。」とのこと。

現在は、金田一京助の子・春彦氏から研究のために寄贈された萱野茂二風谷アイヌ資料館で保管され、北海道教育委員会により毎年翻訳が刊行されています。その一部は登別市立図書館でも読むことができますので、ぜひ、アイヌの叙事詩の世界に触れてみてください。

※金成マツ（1875～1961）

幌別郡幌別村出身。前号紹介の知里真志保の母方の伯母。旭川滞在中には知里幸恵とも同居する。晩年は登別に帰郷し、現在の知里幸恵銀のしずく記念館付近で過ごす。



晩年の金成マツと知里真志保、小田邦雄

（登別市郷土資料館 所蔵）

提供いただいた写真などの紹介

●登別駅の駅弁^{ようず}～洋寿し～



登別駅構内での駅弁販売の様子（川瀬善之氏 所蔵）

車窓越しに駅弁を買い求める姿が見られました。

遠くから「オーイ」と呼ばれるとそちらに走っていき、1～2分の停車時間で何人ものお客さんに弁当とお茶、お釣りを渡す様子は神業かみわざに近いものがあり、売り子さんとお客さんとの軽妙なやり取りは、プラットホームに鳴り響く発車のベルとともにその時代の風物詩の一つでした。

同じころの登別駅には、常時3人の売り子がいたそうで、そして旅行客に人気の不思議な駅弁がありました。



洋寿し（川瀬善之氏 所蔵）

車窓を流れる景色を楽しむ鉄道の旅。

そのような旅のもう一つの楽しみは、その土地ならではの駅弁を食べること。函館であれば「いかめし」が、長万部であれば「かにめし」が有名です。

現在は車内販売に変わってしまいましたが、昭和30～40年代は特急列車が駅に止まるとプラットホームで駅弁の売り子さんが「ベントウ、ベントウベントウ」と連呼し、旅行客が車

その名も「洋寿し」。

登別駅構内立売商会の川瀬将佐氏が、仕事の合間にひよんなことから酢飯とチーズを一緒に口に入れ、そのおいしさに気づいて昭和43年に発案したものです。

緑と白のストライプの弁当箱はさわやかな欧風をイメージし、ふたを開けると和風のすしが並んでいますが、少し甘めの酢飯に載っている具はマグロやイカではなく、チーズ、とんかつ、ハム、焼き豚、きゅうりの5種類で、サンドイ

ッチ感覚で食べる洋風おにぎりのようです。そして、わさびではなく洋がらしが入っており、しょうゆではなくソースを付けて食べます。

全国の駅弁ファンに根強い人気を誇った「洋寿し」も平成16年には販売が終了しました。今は食べることができない歴史的な名品となってしまいましたが、もう一度食べてみたいですね。

◎資料に関する情報提供のお願い

市史編さんグループでは、昔の登別を知る手掛かりとなる資料についての情報を集めています。

お祭りやまちなぎの様子を写した写真や映像、当時の日記など、お心あたりのある方はご連絡ください。

（連絡先）登別市総務部市史編さんグループ 千葉・更科・玉田・小坂

電話：0143-50-6039 FAX：0143-85-1108